

ムーンメモリア・ロストノイズ
八話・デカイムと穴開き魔石

雨和七瀬

デカイムの身体に突き刺さったルークの剣は、容易くデカイムの身体を裂く。しかし水を切るのと同じで、デカイムの動きをほんの少し止める事しかできない。

「コアが見えないだけで、かなり厄介になるな……」

ルークはデカイムから距離を取る。デカイムの切れ目はその間に完全に塞がり、その巨体を揺らして身体の一部を周囲にまき散らす。

「コアって何ですか、なんかあるんですか」

ブランカは戻ってきたルークに尋ねた。

「スライムには生命維持に必要な魔力を貯蔵するための器官がある。今は他の部分と見た目上一体化していて見えない」

ルークはユノの方を向く。ユノも目を凝らして、コアを探しているようだった。デカイムが細長くした身体の一部を素早く伸ばしてきたのを、ルークが切り落として防ぐ。飛び散ったデカイムの破片が小さなスライムとなつて飛び掛かってくるのを、ユノが素手で掴み、起動した魔石を当てて凍らせていく。

「なあ。デカイムの奴、魔力切れ起こしてんなら、放つておきやくたばるか？」

「魔石が転がっている洞窟で魔力を溜め込んでいない理由を考えろ。この個体は人間を捕食してもおかしくない」

ルークの言葉の信憑性を高めるように、デカイムは体を大きく広げて、ルークとユノに覆いかぶさろうとする。二人はそれを避けていると、デカイムの後ろを取り、武器を振りかぶっているブランカを見つけた。

「今は危険だ、無闇に近寄るな！」

ブランカはルークの言葉に顔をルークの方に向けたが、ブランカは腕を止められず、武器はデカイムに突き刺さつた。しかしデカイムはルークの予想に反し、ブランカに攻撃を仕掛けることは無かった。

「……抜いた方がいいですか？」

ブランカは不安げにルークの方を見て問う。その間もルークはデカイムから溶解粘液を飛ばされたり、腕を伸ばされたりといった攻撃を凌いでいた。

「今、それどころじゃ……」

「やれるだけやってみな！」

ルークが言い終わらないうちに、ユノがブランカに鞭を飛ばす。

「は、はい！」

ブランカは武器をしつかりと握り直すと、デカイムに何度も武器を突きさし始めた。

「コアってどんな感触ですか？」

ブランカが「コアを突け」という言葉通りにしようとしていることに気付き、ルークは手がかりになりそうなのが無いかと、防御魔法でデカイムの粘液を弾きながら思考を巡らせる。

「固体だが柔らかい……だから体を覆う粘液よりも弾力があるはずだ、探せるか？」

「やってみます！」

そう言うとブランカはデカイムをかき混ぜるように武器をぐるぐると動かし始めた。しかしさすがのデカイムも不快に感じたのか、ブランカの武器を身体から引き抜いた。それに対してブランカは一步引いて身構えたが、それでもデカイムはブランカを攻撃しない。

「あ、待て！」

ブランカはデカイムを追いかけて、もう一度武器を突き刺し、ぐによぐによと音を立てながら急いでコアを探そうとする。デカイムは逃げようとするのを止め、プルプルと表面を揺らし始めた。

「！ ブランカ、一旦退け！」

「え」

ブランカは動きを止める。それでは回避が間に合わないかと判断し、ユノに渡した魔石を使うべき、とユノに指示を出す。

「ユノ、動きを止めてくれ」

「おうよ！」

ユノは魔石を思い切って投げた。魔石はユノの強肩によって一直線に飛び、デカイムに命中した。その瞬間、デカイムを覆う粘液がパキパキと音を立てて凍り付き、デカイムは身動きを取れなくなった。

ユノが作った隙を見て、ルークは腰を抜かすほどではないものの茫然としているブランカの元に急ぐ。ブランカはルークが自分の元に来ようとしているのに気付くと、凍り付いたデカイムに刺さったままの武器を引き抜こうとし始めた。

「ごめんなさい、咄嗟に動けなくて……」

怯えている目。それが無知によるものであると気づき、ルークはブランカを落ち着かせるように、意識して落ち着いた声を使って諭す。

「今は無事なのだから、構わない。……ブランカ、デカイムはお前を攻撃しようとしている。武器は後でいい、魔石の効果が切れる前に一回離れる」

ルークはそう言うとブランカをデカイムから離れさせた。十分に距離を取った後、洞窟に転がっている穴の開いた魔石を手で掬い上げ、それを握りしめる。ルークが手を開くと魔石はほんのりと光を帯びだした。

「魔石に追加で魔力を込めた。武器がデカイムから取り返せるまでは、攻撃を避けながら遠くからこれを投げろ」

ルークはブランカに魔石を渡す。ブランカはルークが意図することを読めていないのか、怪訝そうな顔をしつつ受け取った。

投げられた魔石の魔力を吸いつくしたデカイムは、凍り付いてしまった粘液を内側から割り、脱皮をするように這い出てきた。デカイムはもう一度、今度は明らかにブランカに対して威嚇した。ブランカが背を向けて走ると同時に、ユノが割って入る。

「おら、もう一度喰らわせてやろうか！」

ユノが魔石を持った手を振りかぶると、デカイムはユノに向けて粘液を飛ばしてきた。ユノはそれを軽い足取りで避けると、魔石を投げた。今度はデカイムの体内にまでめり込み、内側から凍り付き始めた。しかしデカイムは一回目の魔石で慣れたのか、どんどん魔石の魔力を吸い、氷結の進行を止めてみせた。ブランカが続いて投げた魔石の粒も、同じように魔力を吸われてしまう。

(同じ魔法は何度も効かないか。凍結はもう通用しないとなると……『氷冷箱』か)

ルークは先ほどブランカに渡したのと同じように、大量の小さな魔石に魔力を込め始める。

「強くないか、コイツ！」

ユノはルークに確認を取ろうとしたが、ルークは魔力を込め終えた石を地面にまき散らしていく、ユノにとっでは理解しがたい行動をとっていた。

「他より大きい個体が強いのは当たり前だろう」

デカイムの伸ばした触腕を剣で薙ぎ払い、攻撃を凌ぐ。攻撃を弾かれたデカイムはそのまま触腕を地面にたたきつけ、魔石を取り込んでいく。魔力が魔石の効果を発動する前にあっけなく吸い取られていくと、段々とデカイムの身体を中心に球体の輪郭が浮かび上がってくる。

「あの丸のつてコアだよな？ もしかして魔力を食わせるために魔石撒いてたのかよ！ 強くなったらどうすんだ！」

ユノがコアの輪郭に気付き、ルークを問いただす。

「最善手だ。ユノ、俺がデカイムを引き付けるから、反対側に回ってブランカの武器を回収してくれ」

ルークは簡潔に答えた後、ついぞと言わんばかりにユノに指示を出した。ユノは「無茶言うな！」と抗議したが、ルークがデカイムの懐に突っ込んでいくのを見て、大人しく時機を窺うことにした。

足元にルークがやってきたのを認識したデカイムは覆いかぶさろうと体全体を薄く、大きく引き伸ばした。ルークはその中でも特に薄くなっている部分を狙って刃を入れる。そのままコアに向かって剣を下ろすと、デカイムはコアを守るために攻撃の予備動作を止め、ブランカの武器を保持していた粘度の高い液を移動させてコアを覆う。

「よし、今だな！」

ユノは湿っている地面をあえて滑り、デカイムが防御を止めないうちに近づく。そしてデカイムの動きに合わせて揺れる長物を掴む。その瞬間。

「ぐッ………いつてえ！ 何だこれ！」

ユノの手に、武器から発せられる稲光のようなものが絡みつく。一瞬怯んだものの、ユノは足で武器を蹴り上げ、引き抜くのではなく、無理やりデカイムの身体をすり抜けさせて取り出した。

「ブランカ！」

ユノはブランカに声をかけると、すぐさま武器を宝利投げた。ブランカの足元までは届かなかったが、ブランカは武器に駆け寄り、これを受け取った。

「ありがとうございます！ コアも見える………ルークさん、指示をください！」

ブランカは、デカイムと対峙し続けていたルークに指示を仰ぐ。ルークはブランカが武器を持っていることをデカイムの身体越しに確認すると、攻撃を仕掛けてきたデカイムの触腕を数本切り落とし、その場を離れた。デカイムは離れてしまった粘液を足元で取り込みなおし始める。それを見計らって、ルークは左手を突き出した。

「（フリジオラ〜）！」

冷却の呪文を唱えると、辺りが冷気に包まれる。一瞬遅れて、デカイムの巨体は動きを鈍くしていく。そして、ピタリ、と動きを止めた。

「ブランカ、今だ。貫け」

「はいっ」

ブランカは武器を構え直すと、一目散にデカイムの元へ駆ける。そして、その勢いを乗せ、デカイムのコアを一突きした。武器はコアに深く突き刺さり、そして貫通した。勢いあまって、ブランカの手もまた、手首ほどまでデカイムの身体に突き刺さる。

声とはとても形容できない、水の中で大きな泡が弾ける音。それがデカイムの断末魔であった。巨大な粘液の塊は自立を止め、どろどろと洞窟の地面に広がっていく。「やったな、ブランカ！」

丸腰も同然になり、離れて見守っていたユノがブランカに駆け寄る。しかしブランカは静かなものであった。

「どうしたよ、なんかどつか痛いとか——」

ブランカは手を差し出す。ルークも様子がおかしいと思っただけで、粘液中に手は赤くかぶれていた。

「さっき、粘液に触っちゃいました……」

「や、やべえ！ 傷薬……いや先に真水！ ルーク、水汲んでくれ！」

ルークはユノの言葉を聞き終える前に靴から飲用水を取り出し、ブランカの手にかけて。そして、念のために足元も確認すると、ブランカの足元から溶解液による煙が上がっていた。ルークは咄嗟にブランカを担ぎ上げ、粘液から遠ざけた。

「ユノ、水を大量に汲んでくれ！……ブランカ、その装備は防護魔法とか掛けていないのか!？」

「ぼうご……?」

ブランカのキョトンとした顔に、ルークはブランカの無知さを思い出した。

ユノは村人が置いて行ったであろうバケツを手に取り、湖水を掬い上げ、ブランカの足に掛けた。粘液を落とすきると、少し融けたものの穴などは開いていない靴が露わになった。

「ふう……間に合ってよかった……。ルーク、そろそろブランカを降ろしても良いんじゃないか?」

ユノはバケツを地面に転がす。木でできたバケツがポコポコと音を立て、緩やかに転がっていく音が響く。

ルークは何も言わずに、来た道を引き返し始めた。

「ちよ、ルークさん、なんで」

「……さつき使った冷却魔法で、地面が凍っている可能性もある。底の平らな靴で歩いたら滑るだろう」

ルークが肩にブランカを担ぎながら歩くのを、ユノは後ろから楽しげに眺めながら付いて行った。

洞窟から出ると、駐在兵が駆け寄ってきた。後ろには村人の姿もあった。

「随分と時間をかけたじゃないか……負傷者か?」

駐在兵はブランカが担がれているのを見て血相を変えた。

「案ずるな、全員傷薬で治る程度だ。ブランカは靴が融けたから歩かせなかつただけだ」

そう伝えるとルークはしやがみ、ブランカを降ろす。

地に足を付けたブランカは、自分を心配そうに見つめる駐在兵の前で立ち止まると、足を動かしたり、くるっと回ってみせた。

「ご心配をおかけしました。この通り大丈夫です」

「……そうか。ありがとう、ブランカ」

駐在兵がブランカに頭を下げると、後ろで見ていた村人たちは各々謝意を示す。ブランカが固まっているのを不思議に思っただけでルークがブランカの顔を覗き込むと、彼女は目を輝かせながら村人たちの様子を見つめていた。

〈九話へ続く〉